

古代の国づくりと宮ノ脇遺跡

講師 橋本富夫 （元桶川市歴史民俗資料館館長）

はじめに ー宮ノ脇遺跡についてー

桶川市は大宮台地に位置します。市域の西は荒川に接し、東は元荒川によって加須低地と画されています。

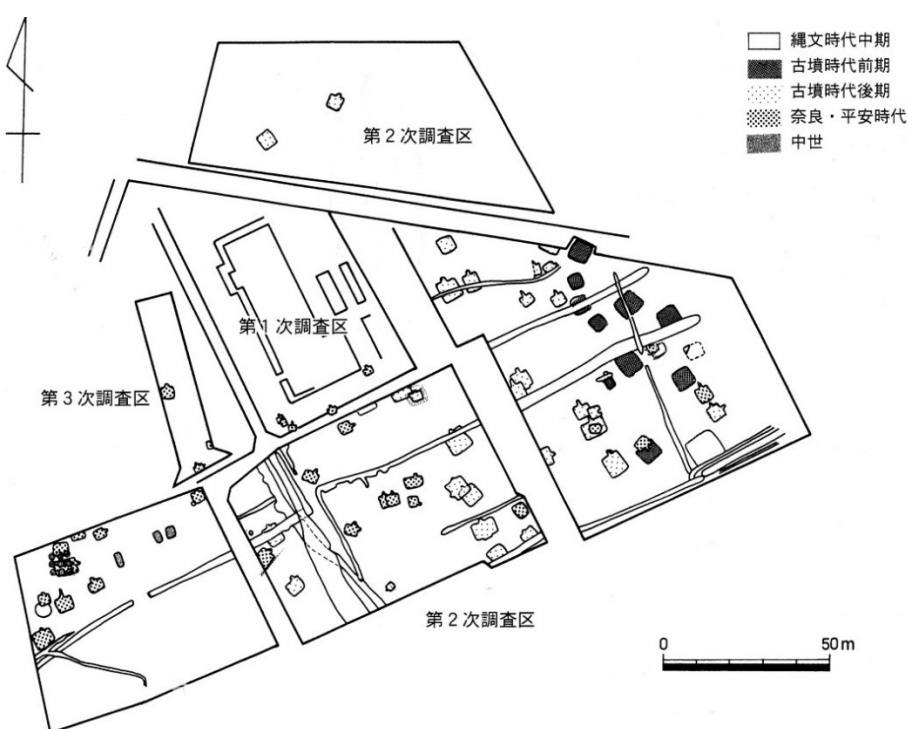
宮ノ脇遺跡は、元荒川に合流する赤堀川に沿う低地に面した標高 12m ほどの低い台地に位置します。赤堀川は、江戸時代に備前堤によって締め切られるまで、元荒川と並行して流れる綾瀬川の上流域にあたります。

遺跡の北側の低地は明治時代には篠津沼と呼ばれていた沼沢地であり、南側は近世初期に新田開発されるまで護摩堂沼があったところです。

この遺跡が所在する桶川市加納地区は、昭和 40 年代以降に住宅開発が進む市街化区域から離れていたために、緊急発掘調査の事例が少ないところでした。

その中で宮ノ脇遺跡は、昭和 58 年以来、3 回の発掘調査が行われ、古墳時代前期と後期、奈良時代から平安時代の集落遺跡であることが判明しました。なかでも、奈良時代の製鉄関連遺構の発見はとくに注目されました。発見された住居の数は、以下のとおりです。

〔古墳時代前期 14 軒 古墳時代後期 32 軒 奈良平安時代 31 軒〕



展示解説 ―地域史を物語る宮ノ脇遺跡―

宮ノ脇遺跡が所在する桶川市加納地区は、昭和 40 年代以降に住宅開発が進む市街化区域から離れていたために、緊急発掘調査の事例が少なく、考古学から地域を物語る資料がともししいところでした。

古墳時代前期から後期、奈良時代と平安時代の集落遺跡として歴史を刻み、さらに鎌倉時代（13 世紀）の館跡と思われる溝に囲まれた遺構群や、江戸時代初期の地域開発を物語る規模の大きな溝状遺構が発見された宮ノ脇遺跡は、まさに地域史を物語ることのできる遺跡です。

よって、今回の展示では、各時代にそれぞれテーマを設定し、幅広い年代の資料を展示することに努めました。

1. 綾瀬川の谷を開く人びと

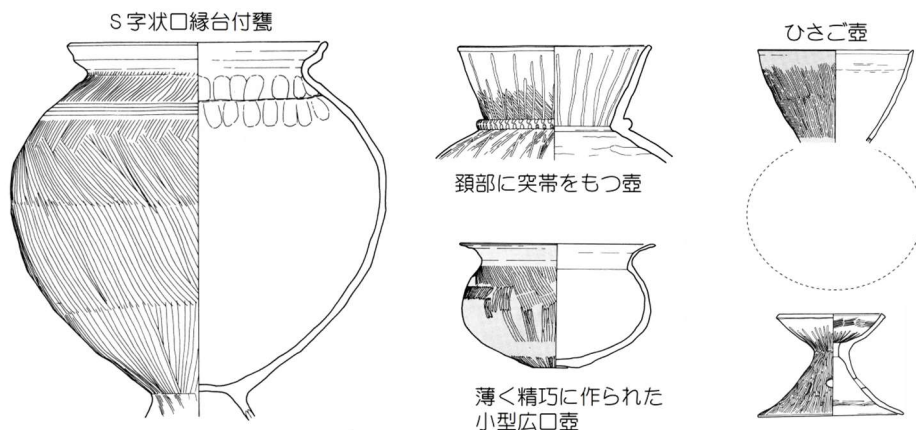
縄文時代が終わろうとしているおおよそ 3000 年前、関東の大河である利根川は、綾瀬川や元荒川の谷に流れこんでいました。宮ノ脇遺跡の北に位置する縄文時代晩期の遺跡である後谷遺跡では、驚くべき川の力が発掘調査によって観察されています。

旧綾瀬川の谷には大量の土砂が流れこみ、川辺に暮らしていた後谷遺跡晩期の人びとの暮らしの場は 3 m を超える厚い粘土層で埋めつくされ、以降、旧綾瀬川の川筋はアシヤマコモがしげる沼が点在する湿原となっていました。

4 世紀、古墳時代が始まって間もなく、綾瀬川をさかのぼって無人の湿原を耕す人びとが宮ノ脇遺跡にやってきました。

（1）西からもたらされた「土器」

3 世紀の半ばをすぎると、近畿地方を中心とする交流が活発化し、各地の土器が日本列島を行き交い、古墳時代の扉が開かれていきます。関東地方では、古墳時代前期にあたる 4 世紀、東京湾岸から河川に沿って内陸へと東海地方西部の土器が運ばれていきました。



宮ノ脇遺跡では、この時代の住居跡が 15 軒発見されています。

ここから発見された土器は、薄手の堅く焼かれたものでした。その形も、S 字状口縁台付甕やひさご壺のように愛知県など東海地方西部のものと同じものです。

このことから、古代の村、宮ノ脇遺跡を拓いた人びとは、東海地方につながる系譜をもっていた人びとだったのでしょう。

2. 古代綾瀬川の道

川の道である元荒川をさかのぼると、その上流には 5 世紀の後半から 7 世紀にかけて営まれた大古墳群である埼玉古墳群にいたります。

(1) 古代の水路と宮ノ脇遺跡

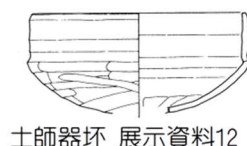
埼玉古墳群を築いた古代埼玉の中心的首長は、行田市周辺のみならず、広い領域に支配を及ぼしていました。その背景には利根川水系の河川による交通があったとされています。

宮ノ脇遺跡は、明治時代まで存在していた篠津沼の南端に面する遺跡です。篠津沼の北端には縄文時代の低湿地遺跡として知られる後谷遺跡があり、昭和 62 年に行われた発掘調査において、篠津沼に流れこむ古代の水路が発見されています。

水路の幅は 10m ほどで、川岸近くにはアシやマコモが茂っており、泥炭の中に 5 世紀の終わりに噴火した榛名山の火山灰（渋川噴火 FA）が堆積していました。この火山灰に覆われた岸辺は人の手によって整地され、土器や木製品が発見されています。

この火山灰は埼玉古墳群において最初に築かれた大型前方後円墳である稲荷山古墳を覆っています。

〔後谷遺跡第 4 次調査〕

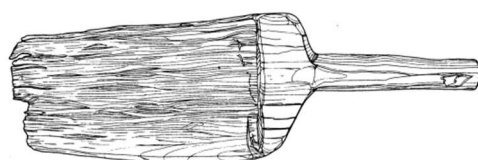


土師器坏 展示資料12

〔参考〕



土師器坏 稲荷山古墳

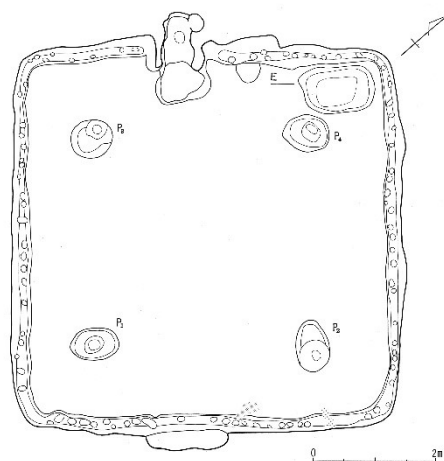


杓子状木製品 展示資料11

(2) 古墳時代後期の宮ノ脇遺跡とその周辺

宮ノ脇遺跡は、古墳時代後期が始まる 6 世紀の前半から再び古代の村として営まれました。6 世紀の後半になると、宮ノ脇遺跡では多くの住居が営まれるようになり、7 世紀まで古墳時代後期の村は続きます。

発掘調査区内において、150 年ほどの間に 32 軒のたて穴住居が営まれていました。



たて穴住居にはかまどが設えられ、長甕（展示資料 25～27）が煮炊きに用いられました。

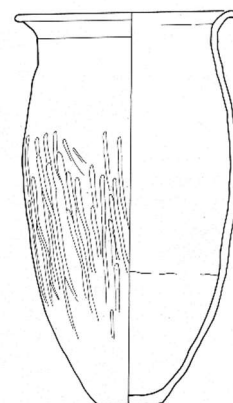
また、食器として土師器の坏がたくさん出土します。

坏は異なる規格のものが共に出土します。赤く塗られた坏は県南西部に広く分布し、黒褐色の坏は県北部から川の道にそって南に分布を広げています。

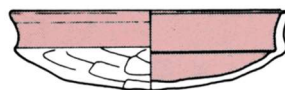
たて穴住居にはかまどが設えられ、長甕（展示資料 25～27）が煮炊きに用いられました。

また、食器として土師器の坏がたくさん出土します。

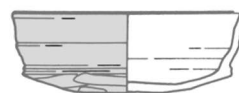
坏は異なる規格のものが共に出土します。赤く塗られた坏は県南西部に広く分布し、黒褐色の坏は県北部から川の道にそって南に分布を広げています。



長甕 展示資料24



比企型坏（赤色塗彩）
展示資料18

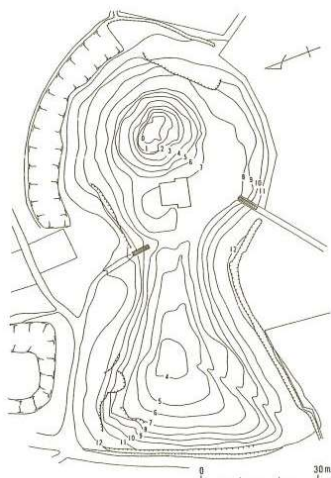
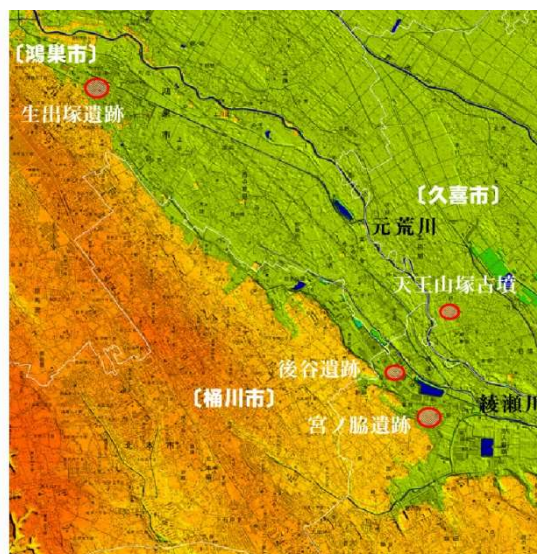


有稜坏（黒色研磨）
展示資料20

6 世紀後半、久喜市菖蒲町下栢間に全長 107m を測る大前方後円墳である天王山塚古墳が築かれます。このころ、関東地方では、前方後円墳を含む古墳の数が急増します。桶川市内でもひさご塚古墳が築かれています。

鴻巣市の生出塚遺跡で作られた埴輪は川の道を通して県内ばかりではなく、東京湾岸の古墳へと運ばれていきました。

こうした交流が、古代武蔵国建設の基礎となっていたのです。



天王山塚古墳 （久喜市教育委員会提供）



生出塚遺跡 埴輪窯（鴻巣市ホームページより）

3. 鉄が拓く古代の村

古代律令国家は、藤原京に続いて、和銅3年（710）に平城京を都と定め、国作りを進めていきました。埼玉県地方は武蔵国となり、その下の郡として足立郡が生まれました。

国家の建設は大規模な地域開発を伴います。国府、郡庁といった古代の役所が設けられ、京と地方の役所を結ぶ道路の建設や田畑の開発も進み、国土は姿を大きく変えていきました。

古代武蔵国において、綾瀬川及び元荒川の流域には鉄生産に関わる遺跡が集中しています。

宮ノ脇遺跡の人びとは、開発の資材として欠かせない農具や武器を生み出す役割を負っていたのです。



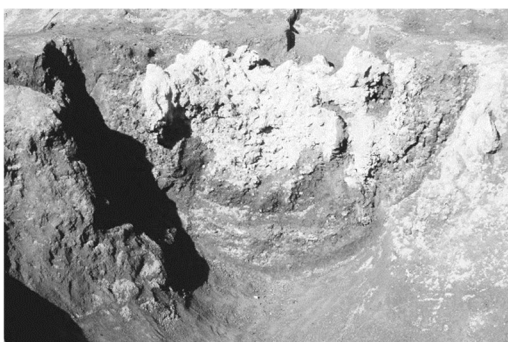
(1) 製鉄の村 宮ノ脇遺跡

奈良時代、宮ノ脇遺跡では、埼玉県内の同時代の遺跡に先駆けて、鉄生産が始まります。

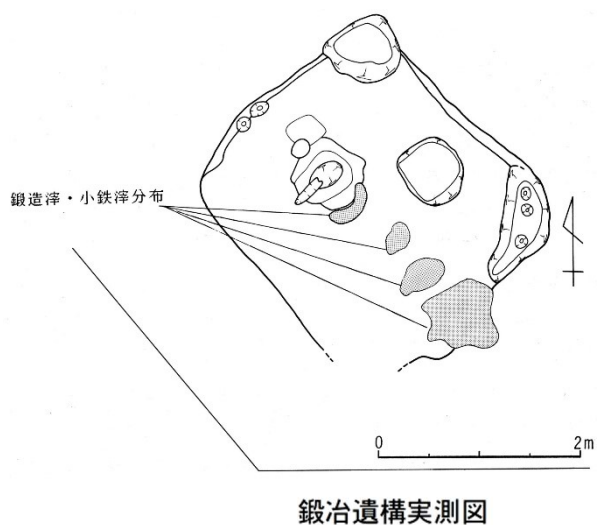
宮ノ脇遺跡の鉄生産の施設は、次の3種からなります。

- 製鉄炉（たたら） 砂鉄を溶解する
- 精錬炉（大鍛冶） 鋼の素材を作る
- 鍛冶炉（小鍛冶） 鋼を鍛えて道具を作る

宮ノ脇遺跡での鉄生産は、砂鉄の溶解から製鋼、そして製品を作る鍛冶と一貫した工程をもっていました。このことは、国作りを進める古代国家のもとで、地域開発の拠点として製鉄の村がおかれたことを示しています。



製鉄炉断面 鉄滓が付着した炉壁



綾瀬川流域の製鉄遺跡

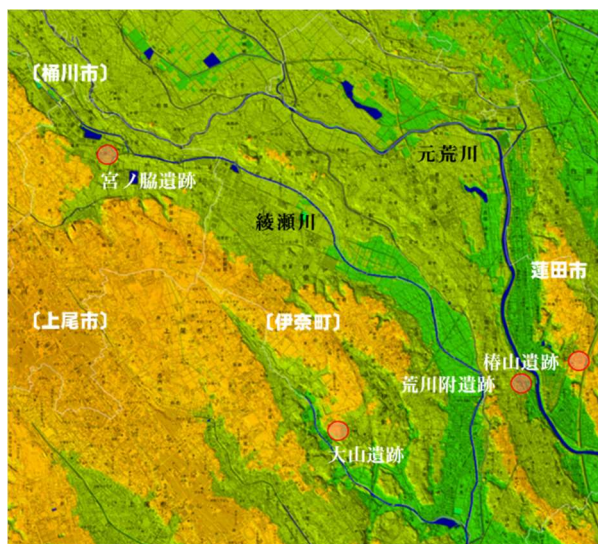
近年の発掘調査によって、綾瀬川と元荒川の流域には、製鉄にかかわる遺跡が集まっていることが知られています。

宮ノ脇遺跡	桶川市	8世紀前半
大山遺跡	伊奈町	8世紀中頃から10世紀
椿山遺跡	蓮田市	9世紀から10世紀

大山遺跡は、8世紀以降、継続して製鉄が行われた遺跡として知られ、製鉄炉、鍛冶工房跡、粘土採掘坑跡などが発見され、近くには製鉄に使う炭を焼いた窯も見つかっています。遺跡内から発見された平安時代の土器には、茨城県（常陸国）からもたらされ甕も発見されています。

椿山遺跡は、平安時代の大鍛冶遺構が発見され、鉄生産に欠かせない送風器のフイゴに装着した羽口が多く出土しています。皇朝十二銭の一つである「承和昌寶（835年铸造）」が発見されたことで知られています。

荒川附遺跡は、宮ノ脇遺跡と同様に古墳時代後期から平安時代に継続する集落遺跡で、河川交通と考えられています。



（2）古代律令国家と足立郡

大宝元年（701）に制定された大宝律令で、日本国内は、公地公民の理念のもとで国、郡、里の3段階に組織されました。その後、霊亀元（715年）に里を郷に置き換え、国郡郷の制度へと移行します。

国と郡には、国衙（こくが）と郡衙（ぐんが）という役所が置かれました。



参考 中宿遺跡（深谷市）
史跡公園に復元された榛沢郡衙の正倉

現在の桶川市域は武蔵国足立郡に属していました。足立郡が歴史資料に現れるのは天平7年（735）ですが、郡衙の所在地は、明らかになっていません。

足立郡には、余戸、発度、殖田、稲直、郡家、大里の各郷があったと記録されています。当時の郷は、戸籍をもとに 50 戸を課税の単位として編成したもので、現在の地名への比定は困難です。

郡衙には正倉が設けられており、郡司の支配下で、各郷から納められた稲は、正税（しょうぜい）として蓄えられ、都への貢納や郡を経営する基礎となっていました。

古代の文房具と官人

成文法である律令による国の運営は、文字をとおして、国から郡、そして郷（里）へと及びました。この制度を動かしたのが筆をもった官人（役人）たちでした。

すなわち、官人が身近においた文房具は、剣にも劣らぬ力をもっていたのです。

右の木札は、「木簡（もっかん）」と呼ばれ、ここに書かれた文字は、出挙（すいこ）と呼ばれた稲の貸し付けの記録が記されています。

木簡は、削って再利用されます。宮ノ脇遺跡から発見された刀子も、こうした文房具として用いられたのでしょうか。



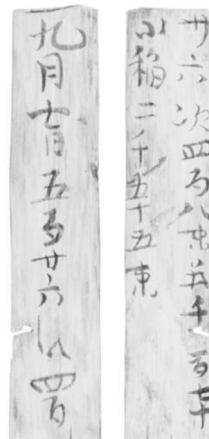
宮ノ脇遺跡出土（表・裏）

古代の硯は、須恵器と同質の固い焼き物で作られていました。奈良時代には円形のものが多く用いられました。

展示資料は、奈良時代の榛沢郡衙（役所）と関連する遺跡から発見されました。

川田谷古墳群が 6 世紀から 7 世紀に展開した桶川市川田谷に隣接する北本市石戸宿の下宿遺跡からは、奈良時代の官人（役人）が身につけた革帯の飾り金具である「巡方」が発見されています。

これは、この遺跡が古代の足立郡北部において重要な役割を果たした集落であったことを物語っています。



小敷田遺跡（行田市）出土



熊野遺跡（深谷市）出土



熊野遺跡（深谷市）出土



巡方（じゅんぽう）

足立郡衙推定地と大久保領家廃寺



軒丸瓦 奈良時代
大久保領家遺跡出土

奈良時代、平城京に東大寺、各国に国分寺と国分尼寺が置かれ、仏教は国家鎮護の宗教とされました。これにならって郡衙にも寺院が付属していました。

さいたま市桜区にある大久保領家遺跡からは奈良時代の寺院の瓦が発見されており、このことから足立郡衙の所在地と推定されています。

(3) 宮ノ脇遺跡の暮らし

国の姿が大きく変わった古代律令国家にあっても、人びとは、伝統的なたて穴住居に暮らしていました。

平安時代のたて穴住居からは、土器ばかりではなく、鉄の道具が多く発見されます。

この大きな鉄製の鎌は、国から割り当てられた口分田を耕し、租税として収める稲を刈り取ることに使われたのでしょう。

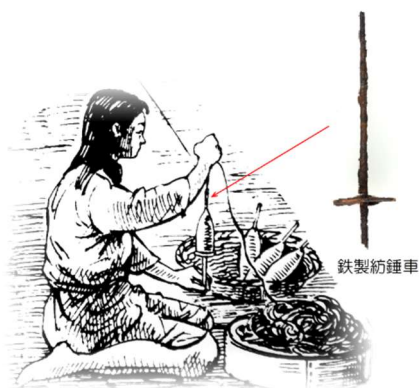


武蔵国をはじめとする東国では、麻布を織ることが税として求められ、重い課役となっていました。紡錘車でつむがれた麻布は、都に運ばれたことでしょう。



鉄鎌（曲刃鎌）

東大寺の正倉院には、税として収められた布や単衣の素朴な衣類が伝えられています。



鉄製紡錘車

この鉄鍬（やじり）は、平安時代にあたる9世紀の住居から見つかりました。律令には、正丁（成人）は兵士として軍団に属することとされ、東国の平氏は、九州での防人や、奥羽地方の鎮兵として動員されていました。



鉄鍬